山村亜希 著

『中世都市の空間構造』

吉川弘文館 2009年2月 322頁

11,000円+税

まず、本書の目次を示すと、以下の通りである。

序章	問題の所在と本書の視角
第一部	空間構造と空間認識
第一章	描かれた中世都市
	—『忌宮神社境内絵図』と長門国府—
第二章	法令にみる中世都市
	—「新御成敗状」と豊後国府—
第二章補論	中世前期における国府と港湾
第二部	空間構造の動態
第一章	東国の中世都市の形成過程
	—鎌倉の空間構造とその変遷—
第二章	西国の中世都市の変遷過程
	—周防山口の空間構造と大内氏—
第二章補論	戦国期山口の空間構造・補論
	—街路・地割の形態分析を通じて—
第三章	中世寺院から戦国期城下へ
	—近江清水山城・城下と新庄城・城下の空間構造—
終章	中世都市の空間構造 —認識と動態—
	あとがき

序章「問題の所在と本書の視角」のまず冒頭で著者は、「本書は、日本中世都市の空間構造を、歴史地理学的視角と方法に基づいて研究するものである」と高らかに宣言するとともに、「本章の検討範囲に関連して、二点を明記」している。すなわち、「第一に、本章は空間への研究視角と概念を軸に研究史を振り返るものの、空間のみを取りあげ、社会構造論を無視した研究史整理を行う訳ではない」。そして、「第二に、本章は従来の研究における空間構造への視角の交通整理を目的としており、理論的な性格が強い。そのため、これまでの研究で明らかとなった中世都市空間の具体像については、文脈に応じて触れるものの、その詳細な紹介は省略し、個別の事例研究も網羅的には採録しない」との方針が表明されている。

先述した宣言の趣旨から「日本中世都市研究における『空間』概念」を第二節で迎っている。本

節では「封建都市論と戦国城下町」、「網野善彦の都市論」、「中世国府・府中研究」、「中近世移行期都市論」、「都市空間史と空間モデルの構築」という論点でまとめられ、以上を踏まえて、「空間概念の相違と問題点」が抽出されている。それぞれの研究段階の問題設定に応じて、異なる空間分析の方法が採用された結果、復原された空間の構成要素、スケールと抽象度が研究段階によって異なっていた、という問題点である。

そして、それを踏まえて、第三節で「本書の視角と構成」が説明されている。過去を、①現実の世界、②主体的世界、③理論的世界という三つの領域に分けて論じる歴史地理学の基本的な研究視角から、中世都市の空間構造に接近することを試みるとの態度を表明している。本書において「都市の空間構造」は、地形、街路・街区の形態的特徴とそれら相互の関係、都市内部における諸施設・諸機能の分布とそれらの有機的結合関係の復原を行い、そこに空間的パターンを見出すことによって析出する、としている。

本書で設定された二つの研究視角は、「第一に、現実の空間構造と同時代の主体による空間認識との相互関係を考察すること、第二に、空間構造の変遷過程を資史料に即して実証的に明らかにし、そのような空間構造の動態と都市をめぐる政治・社会構造との関連を検討することである。

第一の視角は、前述の歴史地理学における空間分析の視角を中世都市に適用して、中世都市の①現実の世界と②主体的世界とを探るものである。本書においては、後者の②における世界を、空間認識という用語で表現することにしたい。ここで言う空間認識とは、同時代の人々による都市空間の認識・把握のあり方を意味し、それはしばしば同時代の絵図や史料の中に表現される」(22頁)とする。この視角に対応するのが第一部である。

これに対して、上述された第二の研究視角に呼応して、第二部が当てられるという構成をとっている。

以上のような全体の構成を踏まえ、個別の章に立ち入って紹介しよう。

「空間構造と空間認識」と題された第一部は、長門国府と豊後国府とが取り上げられている。

第一章「描かれた中世都市—『忌宮神社境内絵図』と長門国府—」は、南北朝期における長門

国府の空間構造とともに、「忌宮神社境内絵図」という中世絵図に描かれた長門国府像を明らかにし、両者を比較している。前者については、発掘調査の結果も取り入れているのに対して、後者については、絵図に描かれた都市空間を作成者（ここでは忌宮神社）の空間認識と考え、空間構造の実態との相違を詳細に検討している。そして、現実の長門国府は、地形に適合的で、分散的・複合的な空間構造であったのに対し、在地領主である忌宮神社は、都市構成要素を境内絵図という方形の構図に収斂させ、統一的・求心的な構造として認識していたと指摘している。ここから絵図に描かれた中世国府像は、必ずしも現実の空間構造そのものと一致するとは限らないと問題提起している。

次に、第二章「法令にみる中世都市—『新御成敗状』と豊後国府—」とその補論「中世前期における国府と港湾」では豊後国府、すなわち今の大分をフィールドに選んでいる。仁治3（1242）年に大友氏によって制定された「新御成敗状」という史料における都市空間の描写について、補論で復原した現実の空間構造と比較・考察している。

そして、第二部の「空間構造の動態」では、鎌倉と山口という二つの都市とともに、湖西の清水山城とその城下などが取り上げられ、その動態を捉えようとしている。

第一章「東国の中世都市の形成過程—鎌倉の空間構造とその変遷—」は、京都と並ぶ東国の「都」とも言うべき鎌倉を対象として、その空間構造の変遷を辿っている。その結果、鎌倉初期における「谷立地傾向」とでも呼ぶべき自然地形に即応した諸施設・諸機能の立地が、中期以降その傾向を残存させつつも、沖積低地へと進出し、若宮大路周辺に市街が拡大していく中で、都市軸の転換を伴う空間構造の変化が生じたと指摘している。このような都市空間構造の形成・変遷過程の中で、鎌倉初期に若宮大路という直線計画道路が敷設されたが、それは、当初から現実の都市計画の基軸とすべく設定されたものではなく、後に結果として、鎌倉後期に市街が周辺に集中するようになったと推定している。鎌倉においては、都市空間構造を抜本的に転換させるほどの権力によるダイナミックで急激な空間形成は生じなかったと結論づけている。

「西国の中世都市の変遷過程—周防山口の空間構造と大内氏—」と題した第二章では、大内氏の守護城下、周防山口の形態と構造を論じており、少し詳しく紹介する。

まず、寺社・屋敷・城など、諸施設の分布と変遷を可能な限り同時代史料を根拠に比定して図示し、大内弘世が実質的に防長両国の守護職を得て国内支配を完了させ、延文5年（1360）頃、館を山口南東の大内から現山口中心部へ移転させた第Ⅰ期から、五つに時期区分している。

そして、「町空間と武士居住地の形態と変遷」について、上記の5時期ごとに町場と街路パターンを押さえ、文書史料からみた町場の発達を辿っている。さらに、地割の形態分析として、特に短冊形地割に注目したパターンを四つに分類して、その分布を考察している。それらを踏まえた上で、文書史料から山口に町屋や町場の存在を確認できる第Ⅱ期以降、時期毎に町場形態の変遷を考察している。さらに、武士居住地の存在形態にも及び、中世山口の空間構造について、大内氏による都市形態の改変を取り上げ、空間構造の変遷過程として、5期に分けて論じている。「おわりに」では、山口の空間構造の特徴として3点を挙げている。第一に、「町」空間の発達と密接に関係しつつ変遷したこと、第二に、大内氏の統制力は館周辺など一部の空間に限定され、既存の町空間に対しては実態の追認に過ぎなかったこと、第三に、上述した大内氏による影響力が異なる2空間の併存状態は解消されず、16世紀中期に毛利氏の支配へと移ったと論じている。

「戦国期山口の空間構造・補論—街路・地割の形態分析を通じて—」と題された第二章補論では、同じく山口を取り上げ、戦国期に時代を下げて、街路・地割の形態分析を通じて、その空間構造が論じられている。

第三章「中世寺院から戦国期城下へ—近江清水山城・城下と新庄城・城下の空間構造—」は、湖西に位置する戦国期城郭の清水山城とその城下を対象として、室町期から戦国期にかけての空間構造の変化を辿っている。それ以前の天台寺院である清水寺や大宝寺の坊院群に食い込む形で徐々に発展しており、城下空間も、旧来の空間構造を維持しつつ経営した様を描こうとしている。さらに「地域ごとに異なる既存の空間構造の影響を大き

く受けた都市空間構造こそが、中世都市の大きな特徴であるとする(27頁)としている。その意味で、鎌倉や山口と類似しているとして、第二部に入れられたと拝察される。そして、「中世都市においては、空間構造に静態的なプランを見出す研究視角ではなく、空間構造を可能な限り動態的に捉える視角こそが不可欠であることを主張する」(27頁)。

以上は、大きな構想の一環であることが示され、「短冊形地割が連続」した今市を「常設店舗の町屋が立ち並ぶ町として発展していたことが推測される」(284頁)とは、言い過ぎではないか、とか、評者が抱いた細かな疑問点は吹っ飛んでしまう。

終章「中世都市の空間構造—認識と動態—」では、「中世前期の国府・府中については、研究史における空間概念を整理し、異なる概念相互の関係を、具体的な空間構造の復原研究を基に論理的に説明することが可能であるとする(298頁)、「それでは、序章で示したようにこれまでの研究蓄積が最も厚い、中世後期から近世初期にかけての城下町に関しても、中世前期都市と同様に、空間認識をキーワードにすることで、これまでとは異なる視点から都市空間構造の特質を明らかにすることができるのだろうか」と問題を提起している。そして、「第一部で分析を行った二つの中世国府以外で、直接都市内の特定の主体の空間認識を解読できる史料が存在している中世都市は、管見の限りほとんどない」(298頁)としている。

さらに、「城下町における城館・市町・街路・街道・堀といった都市構成要素の建設及び改変の痕跡」に注目し、「景観復原に利用可能な文献・絵図史料や発掘調査による考古学データははるかに多い」ので、それらを利用するとしている。そして、「城下町における特定の主体の空間認識を読み解くには、可能な限り精緻に復原した空間形態から、新しく建設ないし改修された形態を抽出し、その時期の政治・社会・経済的文脈をふまえて建設・改修主体の意図や目的を推定することによって、その背後にある空間認識や理念を考察するという間接的な方法」を提言している(299頁)。

ここで研究史を辿って、「都市形態と武家権力の都市計画との混同」を指摘し、それを引き起こした原因に考察を進め、その一つとして、「これ

までの城下町研究においてプランという用語の無限定な使用」を候補に挙げている。「中世から近世への城下町の変容過程を類型化し、そこに『都市プラン』の用語を用いた」矢守一彦に焦点を絞り、城下町の実際の空間構造と、絵図の描写との「二つの意味が内包されていたが、これらが矛盾なく併存していた理由は、矢守が研究対象とした近世城下町においては、」それらが「ほぼ一致するとみられていたためであろう」(300~301頁)と看破している。この見解に、評者は大いなる賛意を表す。

そして、「都市形態を図化する設計図のような都市計画を持っていたのか、持っていたとしても果たしてそれはどの程度実現できたのか、といった点についての実証が必要であるが、そのような検討は十分に行われていない」(300頁)とも指摘されている。この指摘に関連付けると、評者は、近世では計画図とも言うべき絵図が残されているのではないかと問題提起し、その面からもう一度、城下町絵図を再検討したいと考えている。

このような評者の研究計画はさておき、著者の主張に今一度、耳を傾けよう。

「現在のところ、個別都市における空間構造の変遷プロセスに注目し、その集積と比較によって、動態的な空間構造変遷モデルの構築を目指すことは可能なのではないかと考えている」としている。さらに、「個別の事例研究において分析を強化すべき点が二つあると考える。一つは、都市の立地する地域構造の検討であり、もう一つは、自然環境、中でも地形の復原である」(310頁)とされている。

評者からのコメントを順次、述べていきたい。

まず序章は、終章とともに、「日本中世都市の空間とその研究視角」、史林89-1、2006年を基に、本書の構成に合わせ、大幅に補筆したとある。

次の第一部第一章の基となったと本書で表明されているのは、「南北朝期長門国府の構造とその認識」、人文地理52-3で、その発行は2000年であった。同年に著者は、中世都市研究会編『中世都市研究』7に「南北朝期における長門府中—『忌宮神社境内絵図』の解読を中心に—」と題した姉妹編を寄せている。さらに、第二章「法令にみる中世都市—『新御成敗状』と豊後国府—」と

その補論「中世前期における国府と港湾」では、
各々の母体となる論文の発行は、前者が2002年、
後者が2003年であった。その前の2001年に評者が
「日本中世都市史」の学界展望を執筆した折に、
次のように記した¹⁾。

「最新の長門府中（長府）に関する研究は、
絵図を用いることによって空間認識を問題にしてい
る。これは、人文主義的地理学を念頭に置き、中
世荘園絵図を史料として村落における空間認識を
論じた研究に刺激されたものであり、その研究に
比べると見劣りが否めないが、今後の発展を見守
りたいものである。」

その時点における正直な感想が書き留められて
おり、著者による続編として、「新御成敗状」と
いう史料から為政者の「空間認識」を読み取る試
みがなされるとは、夢想だにできなかった。このよ
うな試みは、第一章の絵図に対してまだ研究成果
の蓄積も薄し、方法論的にも確立しておらず、
成功の水準には残念ながら達していないと思われ
るが、斬新であるし、大いに注目したい。

なお、「空間構造と空間認識」と題された第一
部で研究対象とされたフィールド、「長門国府」
と「豊後国府」について、長府と大分と現代地名
に取って代わらなかったのは、国府の中世におけ
る存在形態を取り上げる意図であろう。そうであ
れば、第二部第二章で取り上げられた山口は、周
防国府である防府に近い上に、大内氏の本貫地、
大内郷は、山口と防府とを結ぶ交通路線上に位置
する。防府との関係性も議論の対象にすべきでは
なかったろうか、と疑問に感じられた。

その山口では山口市教育委員会文化財保護課
によって考古学的な発掘調査が続けられ、大内氏
館跡について、その変遷がかなり判明しており、
それと築山館跡とに挟まる武家屋敷地区は、今後
の発掘調査に期待が高まっている。歴史地理学
には残念ながら認められない、考古学的発掘調
査こそが持つ利点ないしは長所としては、時代
の変遷が判るのに加え、cmオーダーの厳密性を
指摘できようが、万能な訳では決してない。出
土した遺物に語らせるには、戦国期の史料があ
る程度残っていて、解釈が可能であることが前
提となる。大内氏館跡の西門については史料が
少なく、解釈も難しい問題点があると言われる。
歴史地理学的手法による著者の論も推定の域
を出ない訳で、どの手

法も何らかの問題点を抱えている。当時の解
明を進めるには、研究手法の弱点を互いに補
い合う協力体制が重要であろう。

第二章補論の基になった論考（2008年）は、
評者が研究代表者となって日本学術振興会科
学研究費補助金・基盤研究(B)に採択された『
中・近世における都市空間の景観復原に関す
る学際的アプローチ』（神戸大学、2007年）
で著者に分担をお願いしたテーマである。歴
史地理学における研究方法は、明治初期の地
籍図によった地割の復原・考察が主体となり、
第二章の論考（原著は1999年発行）も同様
である。さらに遡る地図の候補として、同科
研プロジェクトでいくつかの近世絵図が確認
された。プロジェクトを企画した研究代表者
としては、それを援用しての研究の進展を願
っている次第である。

さらに山口の場合、「山口古図」が知られる
が、著者が使用していないのは、近世になっ
てからの復原絵図であって、信憑性が低いから
であろうと拝察される。この「復原絵図」につ
いては、さらに後述する。

第二部第一章の鎌倉研究に戻ると、著者の
卒業論文が基になっている。1997年の発表
で、「それ以降の十年間に、鎌倉研究も考古学
的調査も進展し、旧稿脱稿時と研究状況は大
きく変化した」としつつも、「最新の研究史を
ふまえた鎌倉景観研究については、別稿にて
新たに組み込むことしたい」（170頁）と表
明されており、評者としても大いに期待してい
る。

鎌倉に都市計画なし、という論について、
前述した拙稿の学界展望「日本中世都市史」
で評者は次のように記した²⁾。

「そもそも一般に存在の証明は簡単でも、
その否定は困難である。しかも、この場合
は、都市計画という抽象論レベルが問題とさ
れている。実際に景観（の要素：評者注）が
配置される際にどの程度厳密に基づいた「
都市計画」なのか、その質が今後の議論の
対象となろう。いくら厳密に行っても、今
となっては全ての現地比定は不可能である
という限界を絶えずもつのである。」

この指摘に対して、直接ではないにしても、
著者も対応を重ねてはいるが、今もって至
言だと評者は思っている次第である。

第二部第三章は、2005年10月に開催さ
れた第12

回全国山城サミットで報告され、既発表の内容である（高島市教委編『高島の山城と北陸道一城下の景観―』、サンライズ出版、2006）。

このように、本書は、既発表論文が主体となっているが、著者が今まで発表した論文の全てが収録されている訳ではない。本書に収録されていない既発表論文は、本書で言及されただけでも、序章注（5）2002年論文（28頁）、同注（51）2006年論文（32頁）、能登七尾を取り上げた第二部第二章補論注（9）2006年論文（254頁）、同注（10）②2005年論文（255頁）、終章注（21）2008年科研報告書の分担執筆（315頁）、などが挙げられる。終章「中世都市の空間構造」で表明されている研究計画に従い、これからの発展可能性があれば取外して外したのであろうと拝察した。

なお、近世にかけて描かれた戦国期の復原絵図については、著者ご本人により研究が着手されている³⁾。第二部第一章について先ほどコメントした「山口古図」に関する論考など、その面での成果が期待される。

評者は、著者と専門が近いために、著者による既発表論文に対しては、日本史学や考古学など、隣接する諸科学の研究者から批判的なコメントを聞かされたことがある。評者としては、このようなコメントに対して、現時点における著者ご本人による応答を本書で期待したのだが、既発表論文がほぼそのまま再掲されていて、対応しようという態度は薄く、正直なところ残念であった。

著者の研究が隣接諸科学から正当な評価を受けていないと評者は感じる。その原因として考えられるのは、一つには、著者が歴史地理学の基本的な研究視角として、過去を、①現実の世界、②主体的世界、③理論的世界という三つの領域に分けて論じる論点を採用していて、これが隣接諸科学の理解を阻んでいる面がある、と拝察する。本書で言うところ第一部に所収された視点について、特に②主体的世界、③理論的世界が理解されていないのではないだろうか。これを著者一人の責任とするのは酷であろう。

この点に関連して、著者による次の指摘は、思い当たる節がある。「これまでの中世都市研究においては、歴史地理学に対し、地籍図と絵図を使用する学問分野というやや一面的とも思えるイメージが定着している面も否めず、それは歴史地

理学に資料論以上の貢献を期待しない姿勢となって現れることもある」（310頁）。すなわち、歴史地理学は、何も「地籍図と絵図を使用する」のみならず、上記のような研究視角をも基本的に有していると対外的に発信してきたであろうか。そして、相手にうまく届けられたか、我々先学の責任もあろう。

もう一つ考えられるのは、著者の研究手法が、歴史地理学畑による景観復原を徹底したスタイルである点である。評者をはじめとした歴史地理学者としては違和感は無く、さほどの問題も感じない。小林健太郎氏によるご研究のフィールドは、評者のそれとともに、文献史料に恵まれない地方であるのに対して、著者のそれは、鎌倉・長府・豊後国府と文献史料が比較的多いように思われる。典拠とされた史料が近代までを含み、時代を融通無碍に越境し、史料の使い方が甘いと批判を招いた面もあろう。それは、フィールドに即して考察する歴史地理学の特質でもあろう。

これに対して評者自身は、歴史地理学の研究手法を高めるための努力も続けているつもりである。序章「問題の所在と本書の視角」でも紹介された地籍図に関する議論である。

本書は、近年になって隣接科学でも盛んに議論されている研究対象である中世都市について、歴史地理学の立場で貫徹された待望の研究書という位置づけが与えられよう。

（藤田裕嗣）

〔注〕

- 1) 拙稿「日本中世都市史」、建築史学37, 2001, 114頁。本文の「村落における空間認識を論じた研究」として、注釈では、次の論文を挙げた。葛川絵図研究会『『葛川絵図』に見る空間認識とその表現』、日本史研究244, 1982。葛川絵図研究会『絵図のコスモロジー』編集委員会『絵図研究の視点と方法』（葛川絵図研究編『絵図のコスモロジー』上巻、地人書房、1988）。
- 2) 前掲1) 108頁。
- 3) 山村亜希「古図にみる守護所・戦国城下町」（内堀信雄・鈴木正貴・仁木宏・三宅唯美編『守護所と戦国城下町』、高志書院、2006）、同「回憶のなかの戦国城下町―吉田郡山古図

の景観表現とその変化―」（藤井譲治・杉山
正明・金田章裕編『大地の肖像―絵図・地図

が語る世界―』、京都大学学術出版会、
2007）。